【東京都】

東京学芸大学附属国際中等教育学校

ソーシャルアクションチーム　jimotoチーム

高校生ボランティア・アワード2024

jimotoは面白い！中高生が発信する地元の魅力

VISION　中高生も複数の**jimoto**を見つけ、それぞれの魅力や課題をジブンゴトとしてとらえられるように地域の人とアイデアを構築していく

MISSION　**jimoto**に対して興味を持ってもらい、繋がることで生まれる新しい魅力を発見・発信し中高生と**jimoto**の架け橋となる

jimotoで商品開発

和菓子屋×中高生で練馬の魅力を発信！

目指す商品像

①練馬区の**特産品**を利用した商品
②**幅広い世代**の人に興味を持ってもらえるような商品
③**素材**を生かした商品

私たちjimoto商品開発チームが発足したきっかけは、学校の所在地且つ一番身近である練馬区、大泉駅周辺に着目し、地域の特色を生かした商品を開発したいと思ったことだ。練馬区は23区の中で最も農地面積が広く、練馬大根などの練馬区ならではの農作物を栽培しているという魅力があるが、その認知度は高くはないと感じていた。新型コロナウイルスの影響もあり地域と関わる機会が減少している今だからこそ、練馬区に根差したお店と協力して商品を開発することで、より幅広い世代に対して練馬区の魅力を発信したいという考えに至った。
このような思いから、私たちは練馬商品開発プロジェクトを立ち上げた。活動を通して私たちが目指すのは、開発した商品を通して地域の魅力を知り、興味や関心を持ってもらうことで、より多くの人に練馬区とのつながりを感じてもらうことである。そこで、まずは9月に学校で開催される文化祭での販売を目標に、この一年間チーム一同開発に取り組んできた。

和菓子ができるまで！

23’ 4-5月　①アイデアの方針決定

どんな商品が作りたいかについて、手書きでアイデアを描き出していく段階からスタートした。イメージを広げていく上で大切にしたのは、「どの野菜を使用することが有効か」である。練馬区で盛んに栽培されている農作物をより深くリサーチしていった結果、多種多様な野菜が多く栽培されていることが分かった。
ここから、私たちは「練馬大根」など既に練馬を代表する野菜ではなく、あまりイメージのない野菜を使用することで、より練馬区に潜在している農業の魅力を発信できるのではないかと考えた。

商品の案出しの記録

6-7月　②和菓子屋さんとの連携開始

プロジェクトの目的が定まった頃に、私たちは学校の近くで練馬をモチーフとしたお菓子を作っている和菓子屋さんに交渉を行った。私たちのプロジェクトの目的に賛同を頂き、本格的に商品化の実現に向けて一歩を踏み出すことができた。

9月　③文化祭にて活動を発信

文化祭は私たちの活動を発信する初めての機会となった。私たちの部活ではコロナ禍以前も商品開発を行っていたため、ここでは歴史から現在までの取り組みをポスター形式で発表を行った。学校外からの来客者に対して私たちの練馬区に対する思いを共有できたことが嬉しかったと同時に、この活動に対して興味を持ってくれたことで、商品開発を通してより広い対象に対して発信していきたいと強く感じた。

10月　④和菓子屋さんにてインタビュー調査

実際に和菓子屋さんに訪問し、商品開発を進めていく中で生まれた疑問を相談した。これまでメールを中心にやりとりをしていたが、実際に対面で相談することで商品開発の見通しが立ったため、有意義な機会になった。特に懸念事項としていた販売できるお菓子の条件については、「賞味期限が長い焼き菓子を視野に入れて開発していくことが良いのではないか」、というアドバイスを踏まえ、焼き菓子に焦点化したアイデア出しに繋げた。

冬休み　⑤試作品づくり

休みの期間を利用して、選抜した6種類のお菓子を分担して考案から試食まで実践した。家族に試食してもらったことで客観的な視点から振り返ることに繋がり、アイデアを改善することに繋がった。同時に、実際に作ったからこそ工程や所要時間の面で商品化の現実性が明確になったため、試作を行ったことがとても有益であったと感じた。

レシピの記録(一部)

24’ 2月　⑥和菓子屋さんとの連携開始

これまで考案してきたお菓子を、チームのメンバーの作ったものと和菓子屋さんが作ったものを持ち寄る形で、商品のブラシュアップを行うことが出来た。この機会を通して私たちは実際にどの商品を作るのかについて、（1.生産性 2. 価格 3.日持ち 4.和菓子らしさ 5.オリジナリティ）の5つの観点から分析し、特に「和菓子」の要素と、中高生ならではの「ユニークさ」を盛り込んだコーンと枝豆のソフトクッキーと、イチゴと小松菜のパウンドケーキに決定した。一度プロジェクトの原点に立ち返り、このプロジェクトと他のお菓子との差別化を考察した際、私たち中高生×和菓子屋さんというコラボに価値を見出せるのではないかと考えた。アイデアをよりよいものへと形にしていくため、チーム一層より団結していき、**「練馬」の魅力**を探りながら開発・発信に取り組んでいきたいと思う。

今後決定した２つの商品の最終調整を進めていき、９月に開催される文化祭での販売を始めとした校外のイベントへの出店にも挑戦していきたい。

jimotoのPR

私たちの特別な場所を皆さんにシェア！

活動目標
主に観光動画、マップ、ツアーを手段としたPR活動を通して、学校の位置する東京都練馬区大泉学園駅周辺の知名度を上げ、観光客の増加･活性化を図り、フレンドリーなPRで中高生のモデルとなる。
活動内容
地域の商店街や街についてのPR動画を作り、デジタルを活用した貢献方法も模索しながら、手に取れるマップや観光・探索ツアーの企画・実施など、アナログで魅力を伝える活動も行っている。

Youtube上で公開
大泉学園駅南口紹介PV

商店街のお店の紹介動画
英語版

PR動画作成

私たちの学校は、西武池袋線大泉学園駅の南口にあり、徒歩２分の場所に連続テに「練馬区立牧野記念庭園」がある。2023年度上半期のNHKレビ小説「らんまん」の主人公のモデルとなった牧野富太郎博士が亡くなるまで暮らしていた家が今は記念庭園として誰でも入場が可能な観光スポットとなっている。多くの方に練馬区大泉学園を訪れていただきたく牧野記念庭園を中心に、その行き帰りにぜひ立ち寄っていただきたい、地元商店街のお店紹介をまとめたPVを作成した。PR動画で撮影させていただける店舗それぞれの撮影企画書を作成し、アポイントメントを取り、それに基ずき撮影を行った。そして、撮影したものを編集し、PR動画を完成させた。

また、その他にも大泉学園駅南口にある魅力的なお店の1本の動画につき１店舗取り上げる、2分弱の動画2本、そして、Youtube Shorts やTiktokなどに適応した、約30秒ほどのPR動画も作成した。また、**作成したPR動画全てを翻訳し、英語の翻訳版も作成した。**私たちにとってのjimotoである大泉学園駅南口の魅力をより幅広い層の方にお届けるする活動を行った。

地域PRマップ『まきのちず』作成

主にPR動画『大泉学園駅南口紹介PV』で紹介させていただいているお店と「練馬区立牧野記念庭園」の駅につなぐルートを示すマップを作成。

「アニメプロジェクトin大泉2023」：ブース展示

「牧野記念庭園周辺PR動画」と「まきのちず」を練馬区等主催の「アニメプロジェクトin大泉2023」にて展示。PR動画とリンクさせた、牧野記念庭園周辺のルートを示した「まきのちず」の配布数は、1717枚となった。

つながるTokyoボランティアフェスタ 2024：ブース展示

作成してきたPR動画・マップなどを展示するとともに、以前行っていた様々な活動の記録やパンフレットを展示した。

- 長野県上田市で実施したモデルツアーや商品開発活動
- 山梨県小菅村でのスタディーツアーの活動
- 東北スタディーツアーで訪れた宮城県女川町での、オリジナルブランド「あがいんおながわ」の物販活動、学園祭や地元商店街のイベントでの活動

『まきのツアー』企画・実施

本校で行われるSocial Action Weekの認定企画として『まきのツアー』を実施。Actcoin付与対象でもありました。このツアーは、東京都練馬区にある大泉学園駅南口のエリアの中で、主に『牧野記念庭園周辺PR動画』でPRさせていただいたお店や観光地を巡るツアー。今まで作成してきたPR動画やマップの内容を体験してもらうことを目的に行った。校内でツアー参加者を募集し、PR動画を視聴していただいた方々に周りの人に大泉学園の魅力を知ってもらい、自分たちも地域を再認識するとても有意義な時間になった。

jimotoに提案

行くことでしか体験できない地域の魅力を探し提案！

長野県上田市・東御市とのつながり

活動目的
① 「UEDA・Nerima Base」の課題解決案の提示
② 東御市に観光という視点から人を呼ぶ企画の提案
③ 街づくりがどのように行われているのかを外面的に、内面的に理解する
④ 長野県上田市、東御市の交流人口、関係人口を増やすためにできることを中高生の視点から考え、提案する。

地元の練馬区の活動にとどまらず、練馬区の友好都市である長野県上田市との連携を図った。石神井公園駅から徒歩5分の「UEDA・Nerima BASE」というアンテナショップが抱える問題点を発見し、壁にぶつかった。そこで、私たちが実際に行くことでしか分からないことがあるのではと考え、３泊4日の上田・東御スタディーツアーを開催した。東御市は上田市の隣に位置する市であり、街づくり・地域活性化に関する活動をするためのノウハウを培いに伺った。東御には素敵な魅力があるが、関係人口が増えないことが課題として挙げられていた。私たちが学ぶのはもちろん、東御市に何かを残せるようにと企画を立てた。そのため東御市に対して「観光」という視点から東御の魅力発揮できる企画を提案することをした。さらに街づくりのことに関しても情報を収集できるようなプランを立てた。街づくりに関わる大人の人の話を聞くことによって私たちはチームとしても、個人としてもスキルアップできるのではと考え、開催した。私たちは実際に解決する案を探しいに行く前の段階として、今「UEDA・Nerima Base」が抱えている問題を知るためにお店に訪問した。そこで見つけた課題点としては立地、客層 、物産から観光へのつながりだった。このような問題をどのように解決していくのかを考えるツアーへ向かった。

DAY1　2024/3/23

ー外から来た、観光客の視点から上田の魅力に迫るー

1日目は北国街道の柳町を観光し、市役所で勤務していらっしゃる竹重さんのお話を聞いた。竹重さんは**「上田に住む人のためにも観光を作りたい」**とおっしゃっていた。私たちは、この言葉に強く共感した。観光と聞くとどうしても外の人へ意識がいってしまい、地元の人は楽しませる側になってしまうことが多い。外の人だけでなく、地域の人も地元の魅力をより感じられるような観光が上田の皆さんが目指していることだと考えた。

DAY2　2024/3/24

ー大人と連携し、内側から上田魅力に迫るー

２日目は上田の海野町商店街の海野町会館でイベントを開催した。私たちは「助カルタ」と、「青空書店」の２つのイベントを開催した。
「助カルタ」はカルタの札に自分の悩みを書いてグループでゲームをするというワークショップだ。地元のコミュニティーにいる皆さんと意見を共有したかったため、場づくりネットの元島さんの力をお借りして、「助カルタ」を開催した。「助カルタ」を通して、いろいろな世代の色々な悩みを持った人と関わることができた。**年代によって変わる悩みや、家族でないから逆に打ち明けられること**もあり、とても興味深い時間だった。
「青空書店」ではNABOで販売している絵本の古本300冊とリベルテさんのクッキーを販売した。リベルテさんはSATのロゴを作っていただいた上田にあるNPO団体で、昔からボランティア部を支えてくださっている。絵本とクッキーは子ども達の興味を惹き、上田の魅力も伺うことができた。２つのワークショップから特に多く挙がったのは、「じまん焼」「自然が豊か」「昔からの道なみ」があった。

DAY3　2024/3/25

ー東御を知り東御の魅力をPRする企画を提案するー

３日目は東御市へ行った。東御ではいくつかの場所や団体を訪問させていただき、上田についてのお話を聞いた。海野宿で家を一棟貸しをしている上州屋さんのお話が中でも私たちの印象に残った。上州屋さんが海野宿が静かなことも売りの一つだから、賑わうことが全ていいことではないと。確かに、静けさを売りにしている場所に対して人を呼び込むということは魅力を一つ消してしまうことにもなり得る。人がいない＝だめという概念が崩されて、私たちの地元を考えるヒントの一つになった。

DAY4　2024/3/26

ーこのスタディーツアーでの気づきや学びを活かし、Mission を達成するー

4日目は、さまざまな場所に訪問するとともに、最終的なmissionを達成するためにSTのまとめに入った。上田には学校に行けない子どもたちの居場所づくりのために無料で幅広いジャンルの映画を見れる上田劇場がある。上田の町では横のつながりが強いことが、この４日間で感じたことだ。私たちが提案した企画の中には、一泊二日のツアーなどもあった。ツアーの内容には私たちが訪問した団体や場所も含まれていて、体験もツアー内容に入れ込むことで深く関わることができると考えたからだ。

jimotoチームの夢

私たちのjimotoをもっと知ってもらい、jimotoの魅力に気づいてもらう！

私たちはjimotoの魅力をたくさん見つけてきた。
その後発表会などを行うと、視聴者からよく
「新しい魅力を発見できた」という感想をもらう。
こういった感想をもらう度に私たちは達成感を感じることができる。
しかし、同時に「知られていない」と言う現実にも対面する。
このギャップある感情が私たちのやる気を引き出している。
だから私たちは今でも変わらず、
「私たちのjimotoをもっと知ってもらい、jimotoの魅力に気づいてもらう」だ。
今年度開発して商品をPR活動で得たノウハウを活用して、
より効果的に発信していきたい。
より多くの人にjimotoの魅力を広げていくため、
私たちは今日もjimotoの魅力を発信していきたい。

2009年.　東京学芸大学附属国際中等教育学校ボランティア部として創立。
2019年　創立10周年をむかえそのボランティアにとどまらない活動から、ソーシャルアクションチームと改称。
Vision　：「中高生があたりまえに参画できる社会を実現する。」
Mission：「中高生が参画しやすい社会を創るために、中高生のモデルとなる。」
主活動：
地域の魅力や課題を発見・発信・解決する地域に根ざした活動から、国際協力や、寄付のチカラについての教育、環境問題などと多岐に渡って活動しています。これからもたくさんの人とのつながりを大切に、中高生の社会貢献活動の可能性を広げていきます！